

Event Report 2017年 春・夏

『洗庭』名和晃平 | SANDWICH 図録刊行記念対談

日時: 2017年6月25日14時～16時 会場: 神勝寺 無明院

ゲストスピーカー

名和晃平 (彫刻家/SANDWICH代表) × 五十嵐太郎 (建築史/建築批評家)

2016年9月に竣工した、名和晃平 | SANDWICH 設計制作によるアートパビリオン《洗庭》。サワラ材を用い、柿茸きによって外面を覆われた“舟”のような建築の中に、水と光のインスタレーションを抱える、アートと建築が一体となった作品です。その図録『洗庭』の完成を記念し、行われた彫刻家×建築批評家の対談をレポートします。

梅雨入りし、不安定な天候が続く中、晴れ間を時折のぞかせたイベント当日。地元の方、遠方から来た方、関係者など、30人ほどが会場である神勝寺の本堂「無明院」へと足を運んだ。

対談は、建築コーディネーターを務めるフェリエ肇子氏から名和氏へ相談のあった、2012年秋の話題から始まった。当時、同敷地には中国の現代絵画を所蔵する美術館があり、その施設改築がそもそもの神勝寺からの依頼だった。「お寺のほかの施設も含めた周遊する“ミュージアム”という構想があったので、SANDWICHの建築チームと議論しつつ建物のあり方を考えました。リノベーション案と僕の商品も所蔵する新築の美術館案、2つのプランを提案したところ、費用的にもあまり変わらないこともあって《洗庭(こうてい)》とは？

彫刻家・名和晃平氏とSANDWICHが本ミュージアム内に制作したアートパビリオン。「舟と海」「意識と無意識」といったテーマを持ち、建物内部は名和氏のインスタレーション作品を擁する遮光された空間を設計。水面への光の反射率を利用し、日が沈む／昇る海原をただただ眺める、禪の要素を内包した作品となっている。

コレクションを入れる予定でしたが、話を進める中で要素がそぎ落とされていき、現在のプランになったんです」と名和氏。作品のアイデアは、もともと五十嵐氏が芸術監督をつとめた「あいちトリエンナーレ2013」にて、名和氏が発表した《Foam》の制作時期に浮かんでいたのだという。しかし、愛知では展示会場の「暗闇の深さが足りなかった」ため実現しなかった。そうして同時期に依頼のあった神勝寺のプロジェクトへ作品のエッセンスが引き継がれることとなる。

SANDWICHの建築チームは、《洗庭》プロジェクトを立ち上げの契機としている。当時、ロンドンの建築事務所「ヘルツォーク&ド・ムーロン」に所属していた古代裕一氏と日本で一緒に建築をつくろうと話していた名和氏は、古代氏が独立するタイミングで、作家活動を通してすでに関わりのあった建築家・李仁孝氏とともに建築チームを立ち上げたのだ。そして初めて、名和晃平 | SANDWICHの体制でアートと建

築が融合し、作品として結実したのがこの《洗庭》プロジェクトだった。



Kohei Nawa (Foam)

あいちトリエンナーレ (2013年)

小さな泡=「Cell(セル)」が、集合体=「Foam(フォーム)」として、有機的な構造を自律的に形成してゆくインスタレーション作品。生成と消滅を繰り返すセルは、生物の代謝や循環を支える細胞の本質的な振る舞いを表している。

photo: Shumura Osamu SANDWICH

